

柿落興行時に製作されたスタンプ



変化に適応出来なくなり、他の各地がそうであったように、映画館や駐車場化しつつその殆どが解体消滅したのだった。

芝居小屋については書いてみたい。愛媛県内においては、昨今は特に内子座が重要文化財に指定（昨年7月）されたり、やはり内子の旭館が国登録有形文化財に選定（一昨年12月）されたりしているが、他の市町においてもかつては多くの芝居小屋が存在した。伊予市郡中にあった寿楽座、西予市宇和町における栄座、八幡浜市保内町にあった大黒座など。しかしそれらに共通しているのは、やがて社会

“MY TOWN” うおっちゃん 歩き目デス & 足ラテス

Vol.75

八幡浜版“花と竜” 八幡浜劇場の場合

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰・
近代化遺産活用アドバイザー

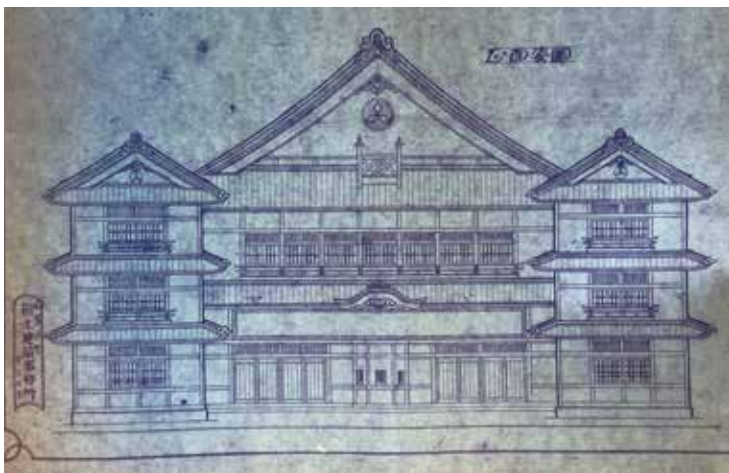
芝居小屋については書いてみたい。愛媛県内においては、昨今は特に内子座が重要文化財に指定（昨年7月）されたり、やはり内子の旭館が国登録有形文化財に選定（一昨年12月）されたりしているが、他の市町においてもかつては多くの芝居小屋が存在した。伊予市郡中にあった寿楽座、西予市宇和町における栄座、八幡浜市保内町にあった大黒座など。しかしそれらに共通しているのは、やがて社会変化に適応出来なくなり、他の各地がそうであったように、映画館や駐車場化しつつその殆どが解体消滅したのだった。



いつの頃から、美空ひばり公演の際に押し掛けた群衆によって折れてしまった、八劇近くにある民家の出格子

舞台寸法6間半で計画されたとのこと。東京の歌舞伎座（柱梁間12間、舞台8間）には劣るものの西日本では堂々の木造大建築だったことが分かる。確かに両袖の付け棟も3階建てになっており、内子座よりも一回り大きい。

ここに面白いエピソードが伝わっている。郷土史に精通された故菊池住幸氏の書き遺された「八幡浜興業盛衰史」によれば、あたかも北九州を舞台に書かれた火野葦平（ルーツは松山市）の自伝的小説



青焼き図面、正面姿図

「花と竜」バリの当時の八幡浜が浮かび上がる。八劇の興業主は川島一眺、つまりは川島組の親分さん。芝居小屋の常として、落成後には柿落^{かきおち}と呼ばれる記念興行を行うが、この時は梨園の大スター尾上菊五郎を東京から招いている。容れ物はデカくても、そうそう呼べる役者ではない。裏がある。先の資料によれば、東京に吉原という江戸から続く歓楽街があり、当時は春日五郎という大親分が俠名を響かせていた。この人物、実は八幡浜の栗之浦、居村家の出身で、関東に出た後その胆力を見込まれ、侠客の名跡を継いだ。一眺（後の勝造）の妻は五郎の妹。可愛い舎弟を俠にするために五郎が一肌脱ぐ事となり、四国の片田舎に六代目菊五郎一座がやって来ることになる。



六代目尾上菊五郎

か、まだ大屋根は完成してなかったというから、舞台裏は相当なてんやわんやだったらしい。それでも小屋は連日大盛況だったようで、一世一代の興行は大成功。ただし、好事魔多し、町中には不穏な動きもあり、対立する兵頭組（平和館）が殴り込みをかける噂。大切な金看板菊五郎に何かあつては一大事、川島側では新港に船を用意し舟遊びと称して、芝居がはねた菊五郎を乗せて太鼓に三味線、芸者衆を引き連れて海の上。

その後日談として、当の菊五郎が宿で筆を執り、「なまぐさき 町入りけり 夏芝居一句を詠んだという。天下の六代目が四国僻遠の漁師町八幡浜で何をどう思ったか、この句でそのまま伝わるが、盛衰史では歌人吉井勇と東京で話した際、共に「いやな町だった」と語った逸話を伝えている。

良くも悪くも、当時の八幡浜には鉄火肌な興業主たちのエネルギーが横溢し、川島の場合、西日本一の芝居小屋を建て、何とかその晴れの柿落させたいという大イベントを成功させていたのかも知れない。元々狭小な土地に飽き足らず、太平洋を打瀬船で横断しようか



八幡新劇場 新築落成記念写真 工事に携わった人々 昭和十一年

「落成記念の工事関係者」 前列左から2人目が川島勝造、その右が前上芳松、続いて圓太郎

という土地柄である。勢いが服を着て歩いているような人物が多い港町、あろうことか東京の六代目は、望まないまでもそうした町の空気に巻き込まれてしまった。写真の川島親分の面構えから、何となく当時の八幡浜のそんな空気も伝わってくる。